

【着目点】

齋藤孝氏はこのテキストで、(1) 私たちにとってなぜ「自己形成」が必要なのか、そして(2) 自己形成のために「読書」の経験がどう関わるか、を固有の視点から述べています。齋藤氏の考えの中で、自分の経験や考えと結びつく(共感する/理解できる)部分はどこか、また、結び付かない部分があるとしたらどこだろうか。そうしたことを頭の中で言葉にしながら読んでみよう。

『読書力』

齋藤 孝 (教育学者)

「一人になる」時間の楽しさを知る

一人の静かな時間は、人を育てる。

人と楽しくコミュニケーションをする中でももちろん人間性は養われるが、一人きりになって静かに自分と向き合う時間も、自己形成には必要だ。音楽を聴きながらボーッと一人でいる時間も楽しい。

しかし読書は、一定の精神の緊張を伴う。この適度の緊張感が充実感を生む。読書は、一人のようで一人ではない。本を書いている人との二人の時間である。著者は目の前にいるわけではないので、必要以上のプレッシャーはない。しかし、深く静かに語りかけてくる。優れた人の選び抜かれた言葉を、自分ひとりで味わう時間。この時間に育つものは、計り知れない。読書好きの人はこの一人で読書する時間の豊かさを知っている。インターネットの隆盛に伴って、すべてを情報として見る見方がいつそう進むであろう。素早く自分に必要な情報を切り取り、総合する力は、これからの社会には不可欠な力である。しかし、何かに使うために断片的な情報を処理し総合するというだけでは、人間性は十分には培われ得ない。

人間の総合的な成長は、優れた人間との対話を通じて育まれる。身の回りに優れた人がいるとは限らない。しかし、本ならば、現在生きていない人でも、優れた人との話を

聞くことができる。優れた人との出会いが、向上心を刺激し、人間性を高める。

読書力さえあれば、あらゆる分野の優れた人の話を落ち着いて聞くことができる。実際に面と向かって話を聞く場合よりも、集中力が必要だ。言葉の理解がすべてになるので、緊張感を保たなければ読書は続けられない。自分から積極的に意味を理解しようとする姿勢がなければ、読書にはならない。読書の習慣は、人に対して積極的に向かう構えを培うものだ。

複雑さを共存させる幅広い読書

「本はなぜ読まなければいけないのか」という問いに対する私の答えは、まず何よりも「自分をつくる最良の方法だからだ」ということだ。

自分の世界観や価値観を形成し、自分自身の世界をつくっていく。こうした自己形成のプロセスは、楽しいものだ。しかし、この厳しくも楽しい自己形成を近年はばかにする傾向がある。とりわけ一九八〇年代以降は、その自己形成を軽んじる傾向が加速した。内容などはなくてもいい、まじめなのはくだらないといった風潮が蔓延した。その影響下で育った人たちは、真っ直ぐに自己形成の問題に向き合うことがしにくくなった。

しかし、自己形成の問題は、避けて通ることはできない問題だ。読書を通じてのまじめな自己形成などには必要がない、楽しければそれでいいといった風潮の中で見失われた自己形成のプロセスは、時に危うい宗教団体に求められた。

たしかに自己というものは、物のように確固たる固定的なものではない。しかし、経験と思考を積み重ねていくことによって、アイデンティティは重層的になり安定してくる。それがおよその傾向だ。オウム真理教事件の際に、優秀な理系のエリートたちが数多く入信していたことが話題になった。彼らはある種自己形成の問題を、思春期から青年期にかけて棚上げしてきたツケを、一気に神秘主義を通して払おうとしたのではないだろうか。読書にしても、幅広く読み続けていれば、オウム真理教の教義などは相対化することができるはずである。

読書の幅が狭いと、一つのを絶対視するようになる。教養があるということとは、幅広い読書をし、総合的な判断を下すことができるということだ。目の前の一つの神秘にすべて心を奪われ、冷静な判断ができなくなる者は、知性や教養があるとは言えない。

私は大学時代、神秘主義的な団体を調査したことがある。入信している人たちは決まって、あるところで思考停止をしていた。絶対的な価値観を一つ受け入れ、他を否定す

る思考パターンに陥っていた。読書の幅も限られていて、自分たちの教義に合致するものが選ばれ推奨された。それと食い違う場合には、憎むべき悪書として攻撃していた。世界文学を幅広く読み、具体的な人間理解力を育てようとする傾向は見られなかった。ある種の哲学的問答には強くとも、いろいろなスタイルの人の生き方を味わうような寛容な態度は少なく、ある一定の生き方だけを模範とする傾向があった。

矛盾しあう複雑なものを心の中に共存させること。読書で培われるのは、この複雑さの共存だ。自己が一枚岩ならば壊れやすい。しかし、複雑さを共存させながら、徐々にらせん状にレベルアップしていく。それは、強靱な自己となる。

思考停止するから強いのではない。それは堅くもろい自己のあり方だ。思考停止せず、他者をどんどん受け入れていく柔らかさ。これが読書で培われる強靱な自己のあり方だ。

『読書力』(二〇〇二年 岩波新書)より

作者紹介【齋藤孝】

一九六〇年静岡県生まれ。東京大学法学部卒業。東京大学大学院教育学研究科博士課程を経て、現在明治大学文学部教授。著書『宮沢賢治という身体』(世織書房)『できる人』はどこがちがうのか』(ちくま新書)『身体感覚を取り戻す』(NHKブックス)『声に出して読みたい日本語1・2』(草思社)ほか。

